

総括

一般社団法人 J A 共済総合研究所 調査研究部 研究員

松吉 夏之介

主催者側を代表しまして、私から本日のセミナーの総括をさせていただきます。

本日のセミナーを振り返りますと、北川先生の基調講演から、地域社会における協同組合の存在意義、役割、可能性というものについて、改めて考える機会をいただきました。

昨年10月から施行されております労働者協同組合法にも触れられておりましたが、協同労働の考え方にもとづき、協同組合は持続可能な地域社会の実現、地域活性化を担う者として期待

されているということを再認識いたしました。

J A の生活支援活動についても歴史的背景からお話をいただきましたが、1970年の全国農協大会で提起された「生活基本構想」は、後の J A 高齢者福祉事業や活動、J A くらしの活動というものにつながる考え方となりました。半世紀を経た今お聞きしても、なお新鮮さを感じるものであったと思います。そして地域のさまざまな組織や団体と繋がり、協同連携、ネットワーク構築に取り組むこと、地域への思いや

願いを共有する学びの場をつくることなど、J A をはじめとする協同組合などが地域の接着剤となって、地域づくりに携わっていくうえでの重要なポイントをお示しいただいたかと思えます。

続いて池田理事長にご報告いただいた「あんしん」の取り組みでは、畑作の盛んな安曇野市・松本市においてさまざまな活動を行っていました。活動を続けていくためにはやはり、J A など活動の運営費を支援する団体の存在が大きいのと思います。しかし、「あんしん」は J A から独立し、組合員の皆様が自ら設立した N P O 法人であることから、行政から介護予防等に関する事業を積極的に受託していらっしゃると思います。

また、活動メンバーの皆様自身が菜種油やひまわり油の搾油、野菜の栽培を行い、植物油や収穫した野菜は直売所で販売するだけでなく、

地元の小学校へ食材として寄付するなど、活動を地域へ還元しておられました。

活動を継続していくための工夫としては、活動メンバー間で、継続した学習の場をつくり、自分たちの活動の目的や意義、課題を共有していること、「あんしんセミナー」や「あんしん広場」を通じて、ゆるやかに人を巻き込んでいくこと、活動に参加することが介護予防につながるという、その活動の効果を認識されていることなどが挙げられたかと思えます。

竹内代表にご報告いただいた「J A はまなかデイサロン」の取り組みは、隣近所との距離が数 km 離れていることも珍しくない酪農地域で、家に閉じこもりがちになりそうな高齢者の外出支援や、社会参加の場を提供する活動でした。コロナ禍において、以前と同様に活動することが難しいなかで、利用者の皆様と手紙でやりとりしたり、徹底した感染対策や工夫によって、

地域の高齢者に寄り添った活動をされてきました。

「JAはまなかデイサロン」は活動の企画者であるJA浜中町が、地域の医療・福祉専門職である「キャンパス釧路」に委託する形で運営されておりましたが、活動を始めたきっかけとして、JAが組合員の女性家族を対象に、暮らしの課題などについてのアンケート・ヒアリングを実施したと伺っております。そのなかで上げられた声を丁寧に掬いあげ、賛同する仲間を増やし、活動の実現に至った点も特徴であったかと思えます。

活動を継続していくための工夫としては、竹内代表がご報告でお示しいただいた図（54ページ）にもありましたように、地域の多様な組織、団体、人が主体となつて、できることをできる範囲で行うという、まさにキャンパスの精神で連携されていることが挙げられたかと思えます。

物や料理を教える行事が、先ほどご紹介いただいた15周年記念誌にも掲載されておりまして、利用者の皆様の生きがいづくりだけでなく、お母さん向けの子育て支援にも取り組まれているといえるのかなと思つた次第です。

お二人の活動の根底には、これまで地域を支えてきた高齢者を何とかして守らなくては、という思いがありました。そしてその思いに共感する地域住民を、緩やかに、巻き込んで行つたといったら語弊があるかもしれませんが、参加する仲間をつくっていく、活動内容、メニューも広がっていったのだと思えます。

地域における課題、例えば今お住まいの地域でこれからも安心して、池田理事長の言葉を借りますと「なだらかに年を重ねて暮らし続けていく」ことに何か不安を感じていた場合には、その不安の内容も、必要とされる助け合いの活動も、本当に地域によってさまざまだと思います。

本日のセミナーは、JAの生活支援の活動をテーマに開催いたしました。こうした生活支援の活動は、公的制度では手の届かない部分を補う助け合い活動や、住民参加型在宅福祉サービスの提供活動などと呼ばれています。ただ、ご報告いただいた実践内容からも分かりますように、一括りにできる決められた活動ではなく、いろいろな活動が行われています。

当研究所では、昨年度は高齢者の農福連携、一昨年度は子ども食堂をテーマにセミナーを開催いたしました。^(*)

実は、池田理事長の「あんしん」の活動にも、広い意味で農福連携の要素が含まれており、学校給食への食材寄付という点では、子ども食堂とはいいませんが、子育て支援の要素が含まれていると思えます。

竹内代表のデイサロンにおかれましても、利用者の皆様が、地域の若いお母さん方に、編み出す。もし地域を何とかしなければ、と思われている方がいらしたら、例えば地域に今何が必要とされていて、行政のサービスは何が足りないのか。そうした地域の課題を誰かと考え、共有する機会、学習の場などをつくらせていただき、仲間を増やし、少しずつでも足りない部分を補っていくことが大切なのかなと思えます。

本日のセミナーが、助け合い活動が必要だと思われている方々に、勇気や希望を与えるものになれば、大変嬉しく思っております。

私自身、生活支援、助け合い活動の調査研究を始めてまだ日が浅いのですが、当研究所には、子育て支援や農福連携、地域における人材育成など、地域の福祉向上に寄与するための研究に携わる者が多々おります。そうした仲間と連携して、安心して暮らし続けていくことのできる地域社会づくりのお手伝いを今後もしていきたい

いと考えております。当研究所からも引き続き、生活支援の活動等に関する情報発信を行って参ります。ぜひご覧いただけたらと思います。

以上をもちまして、本日のセミナーのまとめとさせていただきます。

本日はお忙しいなかご参加いただき、誠にありがとうございました。

(※1)当該セミナーについては、以下の講演録を参照。

「令和3年度JA共済総研セミナー 高齢者の農福連携（ゆるやか農業・農的活動）による新たな可能性を求めて：介護予防・介護等での農業活動を通じた生きがいづくり、健康づくり、社会参加、そして地域への貢献」2021年7月発行

「令和2年度JA共済総研セミナー 地域と連携して拓く子ども食堂の可能性と協同組合への期待」2022年3月発行